



## Contents

- 02 イベントリポート1  
**新展示「在りし日の浦賀ドック」**  
ー咸臨丸フェスティバル参画イベントー
- 04 イベントリポート2  
**夜のレンガドックを見よう**  
ーレンガドックライトアップイベントー
- 06 **チラリ・ドック見学会…ポンプ所編**
- 07 連載 ドックのお話⑫  
**昔、ドックで働いていた方へインタビュー**
- 08 連載 うらが今昔⑫  
**「大黒屋の倒産」**

### 浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業が集積しています。

### レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート（扉船）が開放されているためドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。



# 第19回 咸臨丸フェスティバル 参画イベント

平成29(2017)年4月29日(土)、第51回レンガドック活用イベントを第19回咸臨丸フェスティバルに参画して開催しました。今回新たに行ったパネル展示「在りし日の浦賀ドック」をご紹介します。閉鎖直後の浦賀ドックの絵画を展示しました。今はもう無くなってしまった風景が描かれています。



▲本部館跡地を利用した広場。地元の夏まつりなどの会場として活躍しています。

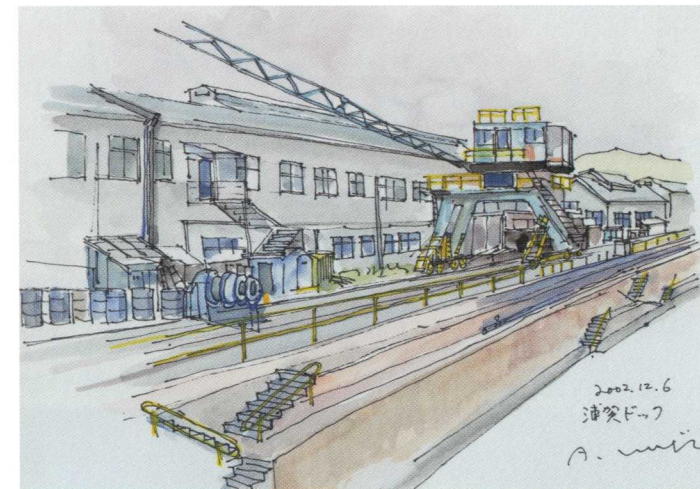
## 本部館

レンガドックの隣にあった建物です。大正12年9月1日に発生した関東大震災により浦賀の町とドックは甚大な被害を受けました。事務所棟が倒壊した際、その代替として残存建物の一部を利用して造られました。現在は取り壊され、「浦賀コミュニティ広場」として利用されています。

## ジブクレーン

レンガドックの東側に設置されている7tクレーンです。昭和20年に製造されました。

多くのクレーンが解体されつつある浦賀ドックの中で唯一原型を留めており、クレーンの後ろに並ぶ建物を含め、この絵の風景は現在でも見ることができます。

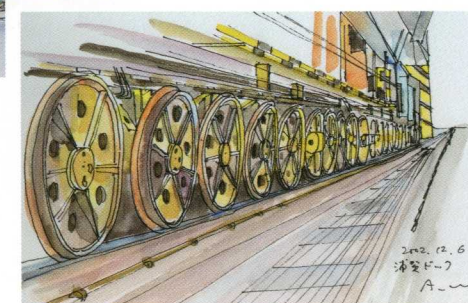
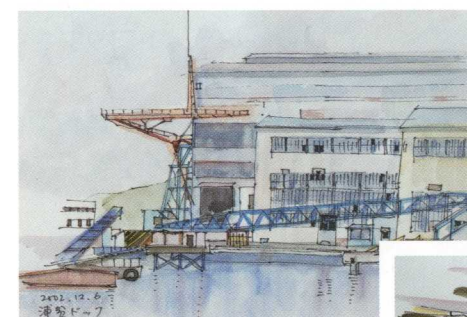
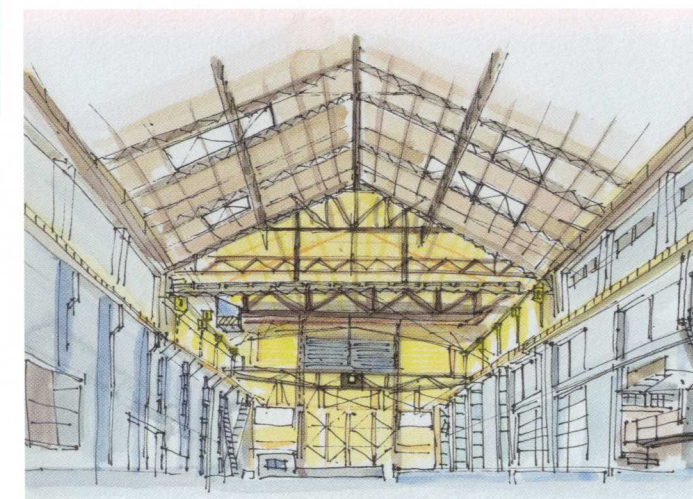


## 犬走り

ドックの側面に作られた通路です。壁面には耐久度の高い「焼過(やきすぎ)レンガ」を使用しているため、普通のレンガより黒っぽく見えます。

## 機関工場

エンジンなど、船の「機関」を整備修理する工場の内部です。天井には大正時代に製造されたクレーンが設置されています。現在は老朽化により中に入っ見ることは出来ません。



## 絵画は他にも多数展示しました。

左：2号ドック側から眺めた風景  
右：クレーンの車輪。ドックにある2基のクレーンは、レールの上を走って移動していました。



# 夜のレンガドックを見よう

## —レンガドックライトアップイベント—

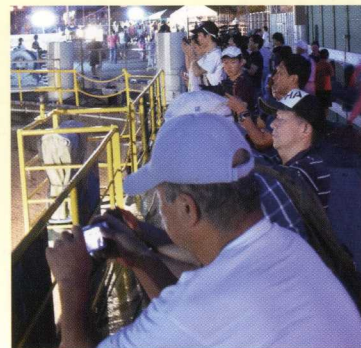
平成29年8月12日（土）に浦賀ドックのコミュニティ広場で開催された浦賀夏まつりに、レンガドック活用イベントが参画しました。今回初めての試みとなる、夕方のドック見学会や、日没後のレンガドックのライトアップを行いました。当日の様子をレポートします。



▲日中のドック。同じアングルから。

普段、明るい時間帯にしか見ることのできない浦賀ドックですが、今回は初の試みとして、夜間のライトアップを行いました。

ドックの先端付近を28基のライトで照らし、浦賀夏まつりに来た皆さんに、いつもと違う雰囲気のドックを見ていただきました。



## インタビュー

**どこから来られましたか？**

—広島県の広島市からです。

**このイベントを、どこで知りましたか？**

—ツイッターで、このイベント情報が拡散されているのを見て知りました。

**ドックを見たいと思ったきっかけは？**

—軍の艦艇が好きだからです。また浦賀ドックに入れるイベントは多くなく、貴重な機会だと思い参加しました。

**見学会はいかがでしたか？**

—昔に活躍した設備が見られて、歴史を感じることができて良かったです。実は以前にも参加したことがあり、今日で見学は2回目なのですが、以前より老朽化している部分が多いことを知り、このまま風化してしまったら寂しいと感じました。貴重な産業遺産ですから、できるだけ保存してほしいと思います。



小早川 匠さん

インタビューにご協力いただいた小早川さんをはじめ、今回の見学会には県外から来た方が多く参加してくれました。これからも浦賀ドックの魅力を発信できるようなイベントを企画していきたいと思います。

## 浦賀夏まつり



盆踊りの様子



抽選会の様子

今回のライトアップイベントが参画した浦賀夏まつりでは、地元の皆さんが参加する盆踊りやダンスサークルによるダンス披露が行われ、盛況を博しました。まつりの最後には毎年恒例の抽選会が開かれ、当選した人には家電や自転車などの豪華な賞品がプレゼントされました。

また、レンガドックのライトアップ時には夏まつりの司会の方にカウントダウンを行なっていただき、協力してイベントを盛り上げることができました。

### 浦賀への思い

#### —夏まつりでの上地市長のあいさつ—

私の考える横須賀復活は、浦賀の再生なくしてはあり得ないと思っています。この夏まつりやライトアップといったイベントをきっかけに、私たちと浦賀の町を発展させていきたいと思っています。

また、住友重機械工業の皆様からは多大なるご支援を頂いておりますが、今後とも力を貸して頂ければと思います。

▲当日、上地市長は浴衣姿で登場し、会場の皆様と盆踊りを楽しみました。





# ちっくドック見学会

ポンプ所編

産業遺産見学会ではレンガドックの周囲を見学できますが、隣接する建物の中でふだん内部に立ち入ることのできないものがあります。今回はそのひとつであるポンプ所についてご紹介します。

「ポンプ所」は、その名の通りドックで使用するポンプが収められている建物です。

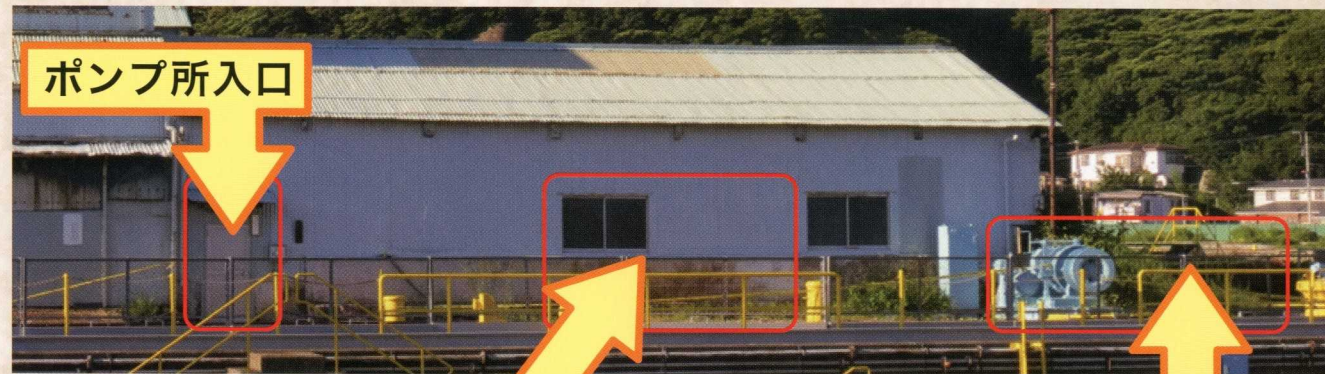
ドック周辺の関連施設には年代などが不明なものもありますが、ポンプ所の建物は明治32年の船渠竣工と同時期に設置されていたことが分かっています。現存するポンプは電気式のものですが、昭和56年までは蒸気式ポン

プが設置されており、ポンプ所に隣接するボイラー室から蒸気の供給を受けて動かしていました。

ポンプ所のポンプはドックから水を抜くためのもので、ドックの底にある「ドックトンネル」から海水がポンプ所へ送られ、建物の脇から海面に排出されます。電気式ポンプは、ドック内の水位を8～9分間で1m下げる能力を有して

おり、入渠する船の大きさにもよりますが3～4時間程度でドックを空にしていました。

平成7年に海上自衛隊の試験艦「あすか」を建造する際、ドックの拡張工事が行われました。それと同時にポンプ所とは別に「水中ポンプ」という装置が新設され、ポンプ所と併用され、ドックの排水能力はほぼ倍増しました。



ポンプ所入口

ポンプ所内部



パイプ末端



(左) ポンプ所内の壁面にレンガ造りの部分があります(赤い丸の部分)。画像左に見える2本のパイプが海まで伸びています。

(右) ポンプ本体です。この2台の他に、湧き水排出用の小型ポンプも設置されています。

ポンプ所の先にあるパイプです。ドック内部から流れてきた海水は、ここから海へ排出されます。

## ドックと浦賀の歴史を愛する会

当会は、産業遺産見学会をはじめとするイベントの企画から運営に関わる活動のほか、造船工具の整備やドックに関する歴史資料の収集などの活動をしています。皆様のご入会をお待ちしています！



←当会員が学生向けの見学会をガイドする様子

詳しくは最終ページのレンガドック活用イベント実行委員会へお問い合わせ下さい。

## ドックのお話⑫

# 昔、ドックで働いていた方へインタビュー

前号から、進水した船に航行に必要な設備や装備品を取り付ける「艤装(ぎそう)」について紹介しています。今号では、艤装の一部である「木艤(もくぎ)」についてのお話を中心に、渡辺秀郎さんに伺いました。



渡辺 秀郎さん

— 木艤の仕事について教えてください。

木艤は船大工の事です。仕事によって船台木工と内装木工に分かれています。船台木工は船の進水式準備などをするので、職員総出で行います。内装木工は船の内装工事をする仕事です。私は主に内装木工を担当していました。

船の内部は鉄板がむき出しなので内張りにベニヤ板を取り付けますが、直接貼らずにベニヤと鉄板の間に少し空間を作ります。この空間の継手として、「ピース」という細長い部品を使います。ピースを鉄板に溶接し、反対側に角材を取り付け、そこにベニヤを釘で取り付けます。

鉄板がまっすぐ出来ているとも限りませんが部屋は綺麗な四角形にしなければならないので、ピースの取付け時には自分の目で確認しながら作ります。その中で、船長や士官用の船室を作るときは特に緊張しました。船の乗組員は上下関係が厳しく、部屋も階級によってグレードに差が付きます。船長室や士官室を任されたときは、使う材料の質に雲泥の差がありましたから、間違えないように時間をかけて作りました。

— 大変だった仕事はありますか？

フェリー船の製造で失敗してしまった事があります。難しいブリッジ(船橋)の工事に関わりたと思った私は、棒心(作業現場の作業者の「まとめ役」をする人の事)に頼んで工事に参加させてもらいました。

私はブリッジの窓を取り付けるためのマーキン(鉄板に図面を描く事)を担当しましたが、マーキンが数センチずれ、そのまま穴が空いてしまい鉄板を埋め直す事になってしまいました。あれは本当に大変でしたが、このフェリー造りに参加させてもらった事は、船大工としての良い思い出です。

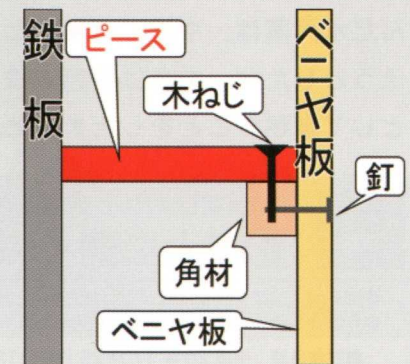
— 仕事をする上で大切にしていた事がありますか？

棒心の仕事を「盗む」事に必死になっていたと思います。同型の船室を作るにしても、工事手順や、部品の取り付け方など人それぞれのやり方がありましたが、当時は大工としての誇りを持って働いている人が多く、自分のやり方を簡単には教えてくれませんでした。そのため、他の船室を作っている人のところへ行って様子を見て、それぞれの仕事を覚えていきました。

— 浦賀ドックと周辺の雰囲気はどうでしたか？

とても活気がありました。若い人だけ見ても大変多くの方がドックに勤めており、クラブ活動も盛んに行われていました。私も詩吟・民謡踊り・写友会といったクラブに入っており、人気が高かった詩吟クラブでは昼休みに大勢で練習していました。また当時はダンスも大変人気があったので、ダンスパーティも毎年行われていました。

ドックの外も大変活気があり、浦賀の周辺には飲み屋がたくさんありました。会社の「みかん山グラウンド」では盆踊り大会が開かれ、地域の方も多数参加し賑わっていました。また、社内の駅伝大会も開かれており、これは現在でも続けられています。



▲赤で示した部品がピース。船体と溶接されている。現在の工法では必要な部分は少なくなったが、窓枠の取り付けなどには使用されている。



# うらが 昔

12

江戸時代後期から明治にかけて浦賀を代表する商人といえば、西浦賀の紺屋町に店を構えていた大黒屋（臼井）儀兵衛の名が真っ先にあがるほど繁栄していた。文政8年（1825）に西浦賀の水揚げ問屋（通常なら廻船問屋と呼ばれ、船を持ち、商品を売りさばく問屋のことであるが、浦賀では船番所の足軽役として荷物の検査や乗組員の数など検査をした問屋を廻船問屋と呼んでいたの、それと区別するために水揚げ問屋と言った）の一覧があるが、そのなかでも「身元慥成者」19店舗を1番組と称したが、大黒屋はもちろんこの中に入っている。

大黒屋を名実ともに浦賀いや三浦半島一の大商人にしたのは、浦賀奉行所与力・中島三郎助が幕末に水戸藩が建造した「旭日丸」がうまく完成しないで困っていた時に手助けに行き、完成にこぎつけた。喜んだ水戸藩は、中島に褒美をとらそうとしたが、中島は幕府の役人として当然のことをしたまでと

褒美を受け取らなかった。しかし、水戸藩からの執拗な要請に困った中島が「それなら浦賀の町へ何かいただきたい」というと、水戸藩から「塩の御用」という答えがあり、「それなら有難くいただきたい」といって、その水戸藩の塩の御用をすべて大黒屋に任せたと話がある。伝わっている。

大黒屋にとっては、さらなる事業拡大とともに徳川御三家の御用達というブランドを手に入れることが出来たので、中島には足をむけて寝られないほどの恩義を感じていた。

その頭われが愛宕山の「中島三郎助忠魂碑」である。函館の戦争で中島自身と二人の息子が戦死し、23回忌の折にようやく名誉回復が叶い、大黒屋の持ち山であった愛宕山を整備し、浦賀園という公園にして、大黒屋が東北・石巻から取り寄せた石に、榎本武揚が篆額（てんがく）を記し、田辺太一がその生涯を書き記した。さらにその除幕式の日、中央気象台長をしていた荒井郁之助が、「魂は治まったが、中島が本当にやりたかった造船をこの浦賀の地で興そう」と提案。大黒屋はもちろんのこと榎本やその席に参集していた人たちの賛同で「浦賀船渠」という会

社が立ち上がった。

大黒屋はその後、渋沢栄一とも浅からぬ関係を持ち、大黒屋が明治32年（1899）に浦賀銀行を立ち上げたときにも、渋沢が頭取を務める第一銀行の支配人佐々木勇之助の助力をうけている。この年、多額納税者として貴族院議員に選出された。

明治30年代半ばには、10数艘の洋式帆船を所持して、塩と米穀を中心に、東北から四国・瀬戸内と広範囲な商いを行なっていることがわかる。

しかし、日露戦争を控え、戦費の算出に苦しんでいた日本は、塩とたばこを専売制にして、国の管理下においた。これが日本国中に塩の販売網をもっていた大黒屋にとって、この専売制は商圈が縮小するだけでなく、店自体をたたむ事態となった。

大黒屋の倒産は、浦賀の経済にも大きな影響を与えた。



大黒屋（臼井）儀兵衛が眠る宗円寺（久比里）

イベント  
情報

## 第54回レンガドック活用イベント

### 仮題 職人に聞く、船体修理の仕事

- ◆講 演：浦賀ドックで働いていた方々が、当時の仕事について語ります。
- ◆見学会：講演会後、ドック周辺を見学します。ドックの底にも下りられます！

- 開催日時：平成29年11月25日（土）13時より（12時30分開場）
- 場 所：（仮称）ミュージアム・パーク推進センター
- 定 員：100名
- 申込期間：11月11日より受付開始
- 申込方法：お電話にて横須賀市コールセンター（TEL：822-2500 / 受付時間 8:00～20:00、年中無休）へお申込みください。
- 参加費：無料

発行

レンガドック活用イベント実行委員会

お問い合わせ

レンガドック活用イベント実行委員会事務局  
（横須賀市都市部市街地整備景観課内）  
〒238-8550 横須賀市小川町11  
電話 046-822-8526 FAX 046-826-0420  
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp

●本誌『レンガドックかわら版』は、浦賀行政センターなどに置いてあります。